

第四話　もうれん舟（幽霊舟）



《その1》 桶っこ、貸してけらいん

ここは漁師町だから、海で亡くなる人がうんといたのよ。

特に和船わせんの時代、帆船はんせんの時代には、いまのようにエンジンで船を動かすんでなくて手漕てこぎの粗末な小さい舟だから、海で亡くなる人も多かったのさ。

昼間から漁に出て、その夜は舟のなかで一晩過ごすわけだが、夜中になるとみんなシーンとして、舟のなかで寝ているわけだな。そうするとな、

ゴボッ、ゴボッ、ゴボッ、ゴボッ……

だれかが、向こうの海から近寄ってくるような音がするんだ。

それが亡くなった人の「もうれん」（幽霊）なのさ。実際に、姿も見えるんだっていうよ。

その人、近寄ってきて、舟に手を掛けてな、細い声で叫ぶのさ。

「助けてけらいん。桶っこ、貸してけらいん」
って、その人、叫ぶんだと。

それは舟に水が入って沈んだ人だから、桶を借りて溜まった水を掻き出そうとするんだべな。

「助けてけらいん。桶っこ、貸してけらいん」

なんべんも叫ぶから、その声に負けて桶を貸すと、自分の舟も

貸した桶で、もうれんに水を入れられて、水舟にされてしまうんだね。

それがわかっていても、漁師気質だから、貸さねえでいらねえ。だから、桶の底を抜いて、汲んでも汲んでも水が溜まんねえようにして、貸してやったもんだよ。

また、漁師たちは縁起をかつぐから、漁に出るときには嫌って使わねえ言葉なんかも随分あるんだね。

お産と死、産火、死火などね。特に漁師は「産火」をきらうんだね。だから、このあたりでは、産屋を建てて、お産はそこでしたもん

だよ。そして、お産があつてから三日は漁に出ないんだ。自分は家にも入らねえ、奥さんと同じ水も飲まねえ、料理も食わねえ。死火もそうだった。

そして、三日過ぎると、枯れた萱かやにシキビきよって行って、香りのいい草を巻いて、それを松明たいまつにして、舟を浄めたもんだ。火は火によって浄められるって言って、今でも漁船はやっているよ。シキビは金華山きんかざんにいっぱい生えているよ、いまも。

これは反対の縁起だけでも、土座衛門どざえもん（水死人）があがると汽笛を鳴らして、そのまわりを右回りに三回まわる。それは土座衛

門が出ると大漁だといわれているんだ。それで、土座衛門を大切に葬って、大事に扱うんだね。よく漁があるように、つてね。

《その2》 きれいな舟になつてみせる

昔はカツオ舟でもなんでも、手漕ぎの小さい舟であつた。

あるときね、向かいの指ヶ浜ゆびがはまのことだが、そこの漁師たち七人で乗っていた舟が遭難してな、乗っていた人全部死んでしまつ

たことがあったの。

そして、しばらくしたある夜のこと、夜浜といって、夜にヒジキ刈りにいった人があったんだと。その人が言うには、向こうに一艘いっそうの舟があらわれたんだと。

「立派な白い舟で、ろうそくをいっぱいつけて、とんでもなくきれいな舟だったよ。目のまえにあらわれて、そして、ずっと向こうのほうさ消えていったよ」

その舟を一人で見たのでなくて、三人で夜ヒジキ刈りにいったから、みんなで見たっていうの。ただし、真ん中の人には見えなかったんだと。端と端の二人には見えただけ、まん中の人に

は、さっぱり見えなかったっていうんだよ。ふしぎなことさね。

《その3》 土座衛門どざえもんは大事にする

舟に土座衛門（水死した人）が流れ着くと、汽笛を鳴らしてから、右回りに三回ぐるぐるぐると舟を廻すのしや。土座衛門が流れていたあたりを汽笛を鳴らしながら、三回廻ることになっているん

だよ。

そして、そういう土座衛門の仏さんに行き合うと、大漁だった
いうのしゃ。だから、流れてきた仏さんは大切に大切に扱ったも
んだよ。

これは、たまたま航海していた人から聞いたのだが、舟を走ら
せていて、なんだか妙に重くなった感じがしたんだと。ひよつと
見たら、死人が舟に掴まっていて、

「桶をくれえー。桶をくれーえ」

こう叫ぶんだと。

そうゆう時に桶をやると、その桶で海水を汲んで、舟の中に入

れて舟を沈めて、中にいる人を海へ引きずり込むんだと。

「おれも海で死んだから、おまえもこっちさき来い」

そういうわけなんだべな。どんどん水を汲んで舟に入れて、舟
を沈めようとするんだそうなの。

だから、桶をやるときはかならず底を抜いて、やるものなん
だよ。